

令和7年度 学校関係者評価報告書

大阪市立姫島小学校 学校協議会

1 総括についての評価

運営に関する計画最終評価の総括に記載の通り、地域からみえる学校の様子を鑑みても、おおむね妥当な内容であると評価する。

安全・防災教育や生活習慣の指導は順調で、児童の92%が「学校が楽しい」と回答するなど高い成果を得た。学力・体力向上については数値への即効性は乏しいものの、経年調査で改善の兆しがあり、粘り強い継続を重視している。一方で教員の働き方改革は、業務効率化だけでは限界があり、制度的な改善を要する課題として残りました。次年度は市の新計画に合わせ、実態に即した目標を再設定する方針である。

2 年度目標ごとの評価

【最重要目標1 安全・安心な教育の推進】

○達成といえる ×達成とはいえない △数値はやや下回るがほぼ達成といえる

1：小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を全学年平均で82%以上にする。(R5=77% R6=80%) **R7=83%○**

2：年度末の校内調査において、不登校児童の在籍比率を前年度より減少させる。

(R5=0.94% R6=1.41%) **R7=1.47% (6/408人) ×**

3：年度末の校内調査において、前年度不登校児童の「改善」を全員について実現する。

(程度はさまざまだが、**R7=(4人)について「改善」傾向 △**)

注：「改善」は次の状態とする(すべてor)

■出席日数(出席認定を含む)の増

■ICTの活用による本人・保護者と学校がつながる回数の増

■養護教諭・スクールカウンセラー・学校支援センターなど、学校内外の専門的な指導・相談につながる回数の増。

4：令和7年度末の校内調査において、学校で認知したいじめについて、すべてを「解消」する。 **R7に認知したいじめ事案はすべて「解消」○**

注：「解消」は次の状態とする。(すべてand)

■一連の学校の指導により加害児童がいじめ行為と学校が認定した言動を続けていない。

■一連の学校の指導に対し、被害児童が一定の安心・納得を得て、長期欠席等に至らず通常の学校生活を送ることができている。

■一連の学校の指導・対応に、少なくとも被害側の保護者が納得をしている。

5：令和7年度の小学校学力経年調査における「学校のきまり・規則を守っていますか」の項目について、肯定的回答率を全学年平均93%以上にする。

(R5=93% R6=85%) **R7=86% △**

6：校外学習やゲストティーチャー招聘、遠足・社会見学などの学習機会を充実させ、令和7年度学校アンケートの「学校では、授業のほかにも、さまざまな体験で学ぶことができる」への肯定的回答率を全学年平均87%以上にする。

(R5=86% R6=83%) **R7=84%** △

7：防災・減災教育を計画的に実施し、令和7年度末学校アンケートの「防災・減災について学び、意識が高まった」への肯定的回答率を全学年平均90%以上にする。

(R5=89% R6=88%) **R7=92%** ○

8：安全教育（不審者への対応・交通安全）を計画的に実施し、令和7年度末学校アンケートの「安全に過ごすことについて学び、意識が高まった」への肯定的回答率を全学年平均90%以上にする。(R6=91%) **R7=94%** ○

★令和7年度 学校アンケートの「学校に行くのが楽しい」「子どもは楽しく学校に通っている」への肯定的回答率を児童・保護者とも85%以上にする。

(児童 R6=74% **R7=92%** 保護者 R6=86% **R7=87%**)

注：この目標は総合的な視点で設定するものなので取組実施の達成状況判断には含めない。

※1～8の目標数値を、わずかに下回る程度のほぼ達成したと判断してもよい数値を含め、半数以上＝4つ以上達成で達成状況 B、3/4以上＝6つ以上達成で達成状況 A として自己評価する。それが妥当な評価であるかは、最終的に学校関係者評価に委ねる。

《学校協議会としての意見》

◆1～8の目標について、この分野の目標達成状況は、あらかじめ学校が設定した評価基準により B 評価としているが、これは妥当な評価であると考える。

【最重要目標2 未来を切り拓く学力・体力の向上】

○達成といえる ×達成とはいえない △数値はやや下回るがほぼ達成といえる

1：小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を全学年平均で40%以上にする。

(R5=35% R6=36%) **R7=33%** ×

2：小学校学力経年調査における国語の平均正答率の対全国比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より0.05ポイント向上させる。

R7 3年1.01 4年0.97=0.02↑ 5年0.99=0.01↑ 6年0.98=0→△

3：小学校学力経年調査における「外国語（英語）の勉強は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を全学年平均で82%以上にする。

(R5=81% R6=81%) **R7=78%** ×

4：小学校学力経年調査における「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」を回答する児童の割合を全学年平均で64%以上にする。(R5=62% R6=67%) **R7=64%** ○

5：健康教育の取組を進め、令和6年度 学校アンケートにおける「健康的・衛生的な生活に気をつけてすごそうと思う」に対する肯定的回答率を全学年平均90%以上にする。(R6年度新設) **R6=84%** × **R7=87%** ○

※1～5の目標数値を、わずかに下回る程度のほぼ達成したと判断してもよい数値を含め、半数以上＝3つ以上達成で達成状況 B、3/4以上＝4つ以上達成で達成状況 A として自己評価する。それが妥当な評価であるかは、最終的に学校関係者評価に委ねる。

《学校協議会としての意見》

◆1～5の目標について、この分野の目標達成状況は、あらかじめ学校が設定した評価基準によりB評価としているが、これは妥当な評価であると考える。

【最重要目標3 学びを支える教育環境の充実】

教育DXの推進《ICTの活用に関する目標》

○達成といえる ×達成とはいえない △数値はやや下回るがほぼ達成といえる

1：授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が年間授業日の89.5%以上にする。（ただし、事務局が定める学校行事ICT活用が適さない日数を除く）

（今年度新設） R6.12時点=89.5% ○ R7.12時点=88.9% △

2：令和6年度文部科学省「リーディングDXスクール事業」に参画し、学習者端末とクラウド環境を特別感のないあたりまえの道具として毎日活用する。その結果として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」を実現する。（外部講師を招いた授業や研修を少なくとも1回行う）

（今年度新設） 全市公開授業を1回実施 ○

3：校内視聴覚部が中心となって授業・家庭学習におけるICT活用の研究・研修を進め、令和7年度末の学校アンケートにおいて、「先生がICT（児童に言葉の説明が必要）を使って授業を進めることで、授業がわかりやすくなる」に対する肯定的回答率を全学年平均85%以上にする。

（R5=85% R6=85%） R7=84% △

4：校内視聴覚部が中心となって授業・家庭学習におけるICT活用の研究・研修を進め、令和7年度末の学校アンケートにおいて、「自分たちがICT（児童に言葉の説明が必要）を使って授業や家庭学習を進めることで、授業や家庭学習がわかりやすくなる」に対する肯定的回答率を全学年平均80%以上にする。

（R5=80% R6=77%） R7=81% ○

5：校内生活指導部が中心となって、ICTを活用した児童の状況把握の研究・研修を進め、令和6年度末の教員アンケートにおいて、「ICTを活用することで児童の状況把握がよりの確になった」に対する肯定的回答率を90%以上にする。

（R4=90% R5未実施） R7=95% ○

6：令和7年度学校アンケートで、「学校の様子や情報が保護者に伝わっている」への保護者の肯定的回答率を全学年平均85%以上にする。

（R5=87% R6=79%） R7=86% ○

7：令和7年度学校アンケートで、「姫島地域の行事に参加したり、姫島地域の人とともに学んだり・活動したり、姫島地域の人に見守られたりして、よかったと思う」に対する肯定的回答率を全学年平均84%以上にする。

（R5=83% R6=81%） R7=83% △

人材の確保・育成としなやかな組織づくり《教職員の働き方改革に関する目標》

8：「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準1を満たす教員の割合を68%以上にする。

（R5=65% R6=65%） R7=69% ○

注：基準1＝1か月時間外勤務45時間以内 かつ 1年間時間外勤務360時間以内

基準2＝1年間時間外勤務時間720時間以内 かつ 1か月時間外勤務時間45時間を超

える月が1年間6月以内 かつ 1か月時間外勤務時間 100時間以内 かつ
連続する2か月の平均時間外勤務時間が80時間以内

☆1～8の目標数値を、わずかに下回る程度のほぼ達成したと判断してもよい数値を含め、半数以上＝4つ以上達成で達成状況 B、3/4以上＝6つ以上達成で達成状況 Aとして自己評価する。それが妥当な評価であるかは、最終的に学校関係者評価に委ねる。

《学校協議会としての意見》

◆1～8の目標について、この分野の目標達成状況は、あらかじめ学校が設定した評価基準により B 評価としているが、これは妥当な評価であると考えます。

3 今後の学校園の運営についての意見

- 「学校に行くのが楽しい」という児童が9割を超えているのは素晴らしい。数値目標が未達の項目があっても、子どもたちが前向きに登校できていることが、あらゆる教育活動の土台だと思う。不登校気味の児童も子ども食堂を楽しみに登校できていることを知れて良かった。
- 学力はすぐに結果が出ないが、経年調査で改善の兆しがあるとのこと、先生方の粘り強い指導が実を結び始めていると感じる。数値そのものも大切だが、子どもたちが『意欲的に取り組んでいる』というプロセスの変化を、地域としても評価したい。
- SNSの投稿や髪の色など、保護者の感覚の違いがある。学校も地域も変わっていく必要を感じている。
- 「働き方改革と教育活動の充実が『二律背反』になっている現状は、非常に深刻。学校の効率化努力だけでは限界がある。PTA や地域の組織も変わっていかねばならぬと感じることがある。